

東洋學報 第貳拾六卷第一號

昭和十三年十一月

論 說

Drug-gu (Dru-gu, Drug) に就いて

山 本 達 郎

序 言

- 一 Drug-gu 吐谷渾説の批判
 - A 唐蕃會盟碑の記載
 - B 西藏文于闐國史の記載
 - C 吐谷渾の谷の音とその西藏名
- 二 Drug-gu を突厥と見做すべき史料
- 三 Drug-gu を廻鶻などと見做すべき史料

結 語

Drug-gu (Dru-gu, Drug) に就いて

序 言

西藏文の古記録にみえてゐる Drug-u, Dru-gu, Drug が何を意味するかに關しては從來種種なる説がある。Drug-u と Dru-gu と Drug が互に一致するものである事は疑のない所であり、それが吐蕃より北方の有力な國家乃至民族を表してゐる事は諸學者の齊しく認める所であるけれども、更に具體的に何を指すかといふ點になるとその見界が甚だ異つてゐて、或は之を吐谷渾であるといひ、或は突厥であるといひ、或は廻鶻であるといひ、或は嚙嚙であるといつてゐる。私は Drug-u に關して未だ定説とされてゐるものない所から昭和十二年五月十六日の史學會大會東洋史部會に於て「Drug-u に就いて」と題する研究發表を試みて、Drug-u を突厥と解釋するべき史料を挙げ、吐谷渾說嚙嚙說に従ひ難い由を述べて置いたのであるが、その後京城帝國大學の大谷勝眞教授から Drug-u 問題を取扱はれた所の「吐谷渾の名稱に就いて」山下先生還曆記念東洋史論文集と題する論文の御惠投に與つた。私は大谷教授の御好意によつて種々啓發せられ知見を廣め得た事を深く感謝するのであるが同教授の結論される所は Drug-u を吐谷渾と見做すものであつて、私は教授の御高説とは別個の見界を有する所から、こゝに聊か自分の所見を述べてみたいと考へる。

元來 Drug-u を吐谷渾に比定する考へは Waddell 氏の研究に始まり、故藤田豊八博士によつて發展せしめられ、更に今回大谷教授によつて主張されたものであつて、その論據は三

個條に要約する事が出来る。即ち第一は唐蕃會盟碑の西藏文の中にある「Drug の地の」解釋であり、第二は西藏文の于闐國史にみえる所の于闐に侵入した Drug の説明であり、第三は吐谷渾の谷といふ字の古音には鹿の音があるから吐谷渾は Drug と音が甚だ近いといふ點である。是等の三點は藤田博士大谷教授の共に問題とされた所であるが、大谷教授は更に Pollot 氏の敦煌發見の文書の中に廻鶻を Drug と爲し、退渾(吐谷渾)を Ha と爲してゐるのを問題として、この一見 Drug 吐谷渾説を否定する如き史料を以て、元來の Drug の意味を表すものではないと見るべき事を述べてをられる。併し乍ら Drug に關する史料は決して右に止まらず、殊に F. W. Thomas 氏の研究した西藏語の文書の中には度々この名が現れてゐる。⁽²⁾以下私は先づ Drug 吐谷渾説の批判を行ひ、その後私⁽³⁾の解釋を述べる事とした。

一 Drug 吐谷渾説の批判

A 唐蕃會盟碑の記載

先づ第一は吐谷渾説の論據となる所の穆宗長慶二年^{西曆八二二年}の唐蕃會盟碑にみえる⁽¹⁾西藏文の記載であるが、その問題の記事は Waddell 氏の英譯文によると次の様になつてゐる。

“As both parties have had dissensions... but are not intoxicated by considerations of pride... they have listened... (to each other). The breadth of... dominions will not again become increased.”

Eastwards... China is to remain sovereign of the region east of Blue Lake [Koko Nor]. Southwards Nepal likewise cannot encroach beyond its boundary... good. Although Tibet has expanded because of its great learning, India since cast out after the fight rules [still?]... the outer western direction. Northwards the Drug [Eastern Turk] land has been entered into possession of....”

文中の括弧の内の文字は譯者の註釋で本文ではない。此の記事は唐蕃兩國の國境を定めるに當つて吐蕃國の四至を示したものに相違なく、東南西北の順序で之を述べてゐる。

Drug land はその北方として現れてをり、吐蕃が領有した地域であると見做されるのであるが、此の記事のみを以てしては Drug が何を意味してゐるか明瞭でない。Waddell、藤田兩氏は之を西藏文于闐國史の Drug-gu の記事と共に考へて吐谷渾と考定し、大谷教授はこの外更に德宗建中四年西曆七八三年の唐蕃會盟の盟文を用ひて同じく吐谷渾説を採つてをられる。⁽⁸⁾

于闐國史は直接には前掲の盟文と關係のないものであるから、之に就いては次節に論じる事として、こゝには建中四年の盟文との關係を考へてみよう。いふまでもなく、唐と吐蕃の會盟は最初建中四年に行はれたのであるが、是はその後間もなく破れ、同じ德宗の貞元三年西曆七八七年に再び平涼甘肅省平涼縣に於て會盟し、更に穆宗の長慶元年西曆八二一年に吐蕃の使者が唐の京師に到つて會盟を行ひ、翌長慶二年には劉元鼎等が會盟使として拉薩の方面に赴いて贊普と會盟を了したのであつて、唐蕃會盟碑は右の最後の長慶年間のものである。大谷教授は前掲會盟碑の Drug land に關して、それは、この會盟の基く所であり、盟文も亦たそれに依つ

たと思はれる有名な徳宗建中四年の唐蕃會盟によつて定められた盟文に對照する時には、略その位地を推定し得るであらう。」といはれ、建中と長慶と兩度の盟文は大なる差がないものとして、次の如き建中四年の盟文の主要なる部分を引用し、

(略上) 古有結盟、今請用之。國家務息邊人外其故地、棄利踏義、堅盟從約、今國家所守界、涇州西至

彈箏峽西口、隴州西至清水縣、鳳州西至同谷縣、暨劍南西山、大渡河東爲漢界、蕃國守鎮在蘭

渭源會西至臨洮東至成州、抵劍南西界磨些諸蠻大渡水西南爲蕃界、其兵馬鎮守之處州縣

見有居人、彼此兩邊見屬漢諸蠻、以今所分見住處依前爲定、其黃河以北從故新泉軍直北至

大磧西南至賀蘭山駱駝嶺爲界、中聞悉爲閑田、盟文有[×]所不載者、蕃有兵馬處蕃守、漢有兵馬

處漢守、並依見守不得侵越、其先未有兵馬處[×]不得新置并築城堡耕種、今二國將相受辭而會、

齋戒將事告天地山川之神、惟神照臨無得^⑨愆^⑩隆^⑪、(略下)

更に同教授はこの引用文に引續いて、これによれば、その吐蕃との定界極めて嚴重且つ詳細に互り、略甘肅の東部以西は悉く吐蕃の有に歸し、黃河北方には賀蘭山にそひて北沙漠に至るもので、南は四川の松潘より西して西山に至り大渡河を境とするものである。従つてこの境界の西方即ち吐蕃の界内には明かに吐谷渾の領域の含まれてゐたことが知られるわけである。」と述べてをられる。私は唐蕃兩國の境界に關しては、建中、長慶兩度の盟文に大差のなかつたといふこの大谷教授の見界に従ひたいと考へる。長慶年度の唐蕃會盟碑の漢文の中には、

蕃漢受於將軍谷交馬、其綬戎柵已東、大唐祇應清水縣已西、大蕃供應_(略下)

といふ文字があり、兩度の協定の國境は部分的には幾分違つてゐたかも知れないが、其に甘肅省の東部附近を南北に走る線によつて區劃される事となつてをり、大體に於て著しい差違はなかつたとみてよいだらう。この見界に従ふと、吐蕃に亡ぼされる以前の吐谷渾の領域は兩度の會盟に於て何れも吐蕃の疆域内に含まれたものと見做す事が出来るのであり、一方唐蕃會盟碑の Drug land は吐蕃の支配下に置かれてゐたと考へられるのであるが、併しそれだからといつて直ちにこの Drug を以て吐谷渾と見做して仕舞ふ事は聊か危険であつて、そこにはなほ疑問を置くべき餘地が残されてゐる。吐蕃が北方に發展してその支配下に置いた地域といふのは、決して吐谷渾の舊領域に限られた譯でなく、更にその北方に擴つてゐる。唐蕃會盟碑の Drug land といふ文字は、吐蕃國の四至を示した記載の中にその北方の境界を表すものとして用ひられたと見做される所であつて、それは吐蕃の勢力範圍の中で最も北の部分に求めるべきものに相違ない。吐蕃は既に唐の高宗の時代七世紀の後半からタリム盆地の北側の北道方面に勢力を伸張し、唐の安西四鎮を陥れた事は史上有名な出來事であつて、その後にも吐蕃の勢力は可成り強力に北道方面に及んだ様である。建中・長慶兩度の會盟の中間の時代に屬する史料として、舊唐書_{卷一九六下} 吐蕃傳貞元六年_{西曆七九六年}の條を掲げてみると、

六年、吐蕃陷我北庭都護府、初北庭安西既假道於迴紇朝奏、因附庸焉、蕃性貪狠、徵求無度、北

庭近羌、凡服用食物所資必強取之、人不聊生矣、又有沙陀部六千餘帳、與北庭相依亦屬於廻紇、廻紇肆其鈔奪、尤所厭苦、其葛祿部及白服突厥素與廻紇通和、亦憾其奪掠、因吐蕃厚賂見誘、遂附之、於是吐蕃率葛祿白服之衆、去歲各來寇北庭、廻紇大相頡干迦斯率衆援之、頻戰敗績、吐蕃攻圍頗急、北庭之人既苦廻紇、是歲乃舉城降於吐蕃、沙陀部落亦降焉、

とあり、當時吐蕃の勢力は北庭の附近方面にも及んでゐたのである。會盟碑の建てられた時の吐蕃の北境は未だ明確に知り得ないけれども、碑文にいふ Drug land とは、或は北道方面乃至それより北の地區を指してゐると考へる事が出来はしないであらうか。前掲の建中四年の會盟文によると、唐蕃兩國の境界は北方は賀蘭山に沿ひ北して沙漠にまで至つてゐるのであつて、長慶元年二年の盟文が之と大差のないものであるとするならば、此の時にもやはり兩國の境界に就いては可成りに北方に至るまでを考慮に入れてゐた事であつたらう。會盟碑に吐蕃の北邊を示してゐる Drug land は、此の様に北方が問題とされてゐるとするならば、之を吐谷渾の地に求めるべきではないだらう。吐谷渾の地と見るならば、それは南方乃至東南方に偏し過ぎる事となる。建中の會盟文は吐蕃が實際に北方沙漠に至るまでを全くその支配下に置いてゐたといふ事實を現すものではなくて、唐蕃兩國間の問題に關する限り、この境界線の西方に於ては唐が權利を拋棄して吐蕃の自由に任せるといふ意味であつたと解釋せられるが、會盟碑の記事に於て吐蕃の領域内に入つてゐたと認められるこの Drug land は、吐蕃の實際に支配した地域を指してゐるのか、乃至又唐蕃の會盟

によつて吐蕃の自由に任せられた所の實際には支配の及ばなかつた地域をも含んでゐるのか、何れであるか明瞭でない。この二種類の解釋の中で後者を探るとするならば、Drug land は天山よりも北方の地域を含んでゐたと思はれるけれども、前者の解釋に従ふとしてみても、それは吐蕃の勢力が及んだ所のタリム盆地の北邊の方面を含んでゐると見做す方がよいのではあるまいか。（而して事實後に述べる如くに北道の方面をDrugの地と呼んでゐる例は他の文獻に於て認められるのである。）建中と長慶の兩度の會盟の中間に於て吐蕃の北境が特に南方に退いたといふ確證は見當らない所であり、前掲の舊唐書吐蕃傳の記事はこの間に於て却つて吐蕃の勢力が北庭の方面に發展した事件のあつた事を示してゐる。兩度の會盟の頃には唐の西域地方に於ける勢力は全く失はれてをり、この期間の中に唐が特に西域に發展したといふ事はない。建中四年の會盟に際して北方沙漠にまで延びた事となつてゐる吐蕃の領土を、長慶の會盟の時に遙か南方の吐谷渾の住地を北邊とするまでに縮小せしめた程の特別な事件は、一向に見當らない所である。而して内藤博士が既に述べてをられる如く、長慶年度の會盟文は吐蕃の申出た所を唐の側に於てそのまゝ認めたものであり、吐蕃がこの際兩國間の問題に關して、北境からの唐の壓迫を受けてゐないのに自ら建中の境界線を遙か南に退けて來るとは考へられなう。會盟碑の西藏文に於ては青海の方面が吐蕃の東境として取扱はれてゐる様であるが、いま假に北境の Drug land を吐谷渾の地としてみると、新疆省の大部分は吐蕃の領域外に出る事となり、東境の青海と

北境の Drug land は吐蕃の全領域からみて共に東北の部分に置かれる事となつて仕舞ふのであつて、之に反して Drug land を前述の如く更に北方であると解釋して吐蕃の大體の領域を推測してみると寧ろ此の方が青海を東邊であるとする事に都合がよいのではあるまいかと思はれる。

會盟碑の西藏文には解讀困難な個所が相當に多いのであるが、解讀された限りに於ては、吐蕃の四至を表した文章の中で、領有する事となつたといはれてゐるのは北邊の Drug land のみであり、この Drug land とは吐蕃の舊來の領土でなくて、その發展によつて新に領有した所の地域であると思はれる。吐谷渾の地も北道の方面もその程度に差違はあつたとしても唐代に會て吐蕃の勢力の及んだ事のある地域といふ意味に於ては同様である。吐蕃が吐谷渾を滅ぼしたのは、會盟碑の長慶二年西曆八二二年からみて一世紀半以上を以前に遡る所の龍朔三年西曆六三三年の事であり、而してその地は元來唐の領土といふのではないのであるが、これに反して北道の方面は唐が安西四鎮を置いて支配してゐた土地であり、吐蕃が四鎮を陥れてから後にも此の方面に於ける兩國間の問題は繼續してゐる譯であり、建中の會盟の時に至つて唐が正式に此の方面を吐蕃の領域としてその權利を拋棄したのである。唐蕃兩國の間の紛争は吐蕃の東邊のみならずその北邊に於ても起つてをり、而して會盟碑が唐蕃兩國間の問題を記載したものである事から考へてみると、碑文に北邊の Drug land に就いて特に “has been entered into the possession of” とすつてゐるのは、恐らくは唐との關係に

關聯して述べた文字であり、吐蕃が會て唐の支配した北道方面に勢力を張つた事、乃至はそれより北方の地域までも唐蕃の兩國の間に於て吐蕃領と認められた事を意味するのではあるまいかとも考へられる。少しく危険性を伴ふけれども、若しも此の様な推測が正しいとするならば、この Drug land は當然吐谷渾の地ではなくて、更に北方に求めなければならぬであらう。會盟碑には解讀されてゐる限り、青海の方面に關してはその先が支那に屬するといふ丈であつて、特にこの方面が吐蕃の領有に歸したといふ記事はなく、恰も元來の吐蕃の領土の如くに述べられてゐる。青海方面が領有に歸したと云ふ記事が元來碑文になかつたものとして假に Drug land を吐谷渾の地と解すれば、碑文に吐谷渾の地を領有したといひ青海の地方に關して之を記さないのは、その間に又何等かの疑問が残るのではあるまいかと思はれる。

總て以上論じて來た所は會盟碑の Drug land が吐蕃の領域内になかつたと假定すれば成立しない所の推論であるが、併し會盟碑の文は吐蕃の四至を示した文中に Drug land を領有したと述べたものと認められるから、それは他國が領有したとするよりも吐蕃が領有したとする方が自然であつて、私は此の Drug land の所屬に關しては藤田博士大谷教授の説にそのまゝ従つて以上の推論を行つた譯である。兎に角會盟碑の記載は甚だ簡略であり、その文面から直接 Drug land の位置を確定する事は困難である。右に論じた所は碑文の直接の解釋としては或は稍々行きすぎた感があるかも知れないが、私は唯間接に他の情

勢から推測する事の可能なる限りに於ては、Drug landを吐谷渾の地に比定する説は決して確實なものでなく、それよりも更に北方に求める方が穩當である由を述べて來たまでである。

B 西藏文于闐國史の記載

次に問題となるのは Drug-gu 吐谷渾説の第二の論據となる所の西藏文于闐國史 (Liñi-yul-gyi-lñi-bstai-pa, Li-yul-gyi-lo-rgyus) の記載である。于闐國史には Drug-gu G.i.A-no-sos が于闐に侵入したといふ話と于闐王の Vijaya-Saṃgrāma とその子が支那に赴き、その歸り道が Drug-gu の軍兵の遮る所となつて王が支那に於て死んだといふ話がみえてゐるのであるが、是等の記事は何れもその時代が明瞭でない。この于闐國史は全般に互つて年次の記載が認められず、寺塔僧院の建立に關する記事を多く掲げたもので、年代的な記録としては甚だ錯誤が多く、種々學者の研究を経てゐるにも拘らず年代の標準が明かになつてゐない。于闐國史の中には于闐王の Vijaya-Kirti が Kanika 王 (Ka-ni-kañi-rgyal-po) 及び Gu-zan の王等と共に印度に軍を進めたといふ記事がみえてをり、此の記事は從來の諸學者の屢々問題とした所であるが、Drug-gu 吐谷渾説を採られる所の藤田博士と大谷教授は先づ此の Vijaya-Kirti の時代を年代の規準と爲し、藤田博士は之を西曆一世紀の末葉、二世紀の初とし、大谷教授は二世紀の中葉と考へ、次に之を本として問題の Drug-gu の于闐侵入の時代を推測してをら

れる⁽⁸²⁾。即ち問題の Drug-gu の于闐侵入は Rockhill 氏及び Thomas 氏の研究によると右の Vijaya-Kirti からそれ〱十四代又は十五代の後に當る所の同名の Vijaya-Kirti とする王の時であつたといふ事になつてゐる所からこの代數によつて藤田博士は Drug-gu 侵入の事件を西紀第五世紀位と爲し大谷教授は第五世紀の前半として居られるのであり兩氏は更にこの事件を共に北魏書〇二西域傳于闐の條にみえる所の吐谷渾の慕利延の于闐侵入と同じであるとしてこゝに Drug-gu 吐谷渾説を主張される。但し右の最初の Vijaya-Kirti に關しては藤田博士と大谷教授の見界がやゝ異つてゐるのであつて藤田博士は Vijaya-Kirti と共に行動した所の Gu-zan を貴霜 (Kushan) Kanika を康居と爲し大谷教授は Gu-zan は貴霜 Kanika は Rockhill 氏等と同様に之を Kanishka 王(迦膩色迦王)と考へ〱これによつて Vijaya-Kirti の時代を決定されてゐる。

藤田博士大谷教授が述べられた如くに Drug-gu の于闐侵入の事件が西曆第五世紀の事であつたといふのが確實であるとするならば〱五世紀に於てはなほその他に嚙噬・蠕蠕の于闐侵入の事件があつたのではあるが〱この Drug-gu を吐谷渾とする説は一應成立する様にみえるであらうけれども残念乍ら私は右の如き年代推定の方法に従ふ事が出来ないものである。十四代の期間を何年と見做すかといふ點も可成りに危険性を含むものであらうが私はそれよりも寧ろその基礎となる所の何人の時代の標準として十四代を數へるかといふ點に疑問を持つてゐる。藤田博士大谷教授の年代決定の方法は最初の Vijaya-

Kirti の年代の推定とその後 Drug-gu の侵入の時までを世代にして十四五代と數へる事とこの二つから成り立つてゐるのであるが、その後者から先に考へてみよう。

西藏文の于闐國史は丹珠爾 (Bsian-dgyur) の中に收められてをり、その全文は會て寺本婉雅氏によつて和譯され、又 F. W. Thomas 氏によつて英譯されてゐるのであつて、こゝには次に Thomas 氏の英譯を引用しよう。于闐國史には Gu-zan 王 Kanika 王と共に印度に軍を出したと云へ、Vijaya-Kirti に關する記事の次にその子の Vijaya-Saṅgrāma に關する記事があり、Vijaya-Saṅgrāma は Dharmakīrti-sa の僧徒を誅した物語を載せられて續く。

Then from the time when king Vijaya-Dharma held the sovereignty until Vijaya-Kirti became king, during fourteen generations of kings, sometimes external enemies led armies into the country and inflicted damage, and sometimes the Li (Khotan) rulers led armies into other countries and troubled their people. After that the Drug-gu 'A-no-sōs led an army into the Li country, and, burning with fire the monasteries generally as far as Hgehu-to-sen, ruined the country. The diminished population was not capable of rebuilding the monasteries.

Afterwards king Vijaya-Kirti's son, king Vijaya-Saṅgrāma, became king at seven years of age. Later he inquired of the seniors in the Saṅghas and his councillors, "How came the fire? By whom was the country ruined? Why was it burned?" The Saṅghas and councillors having given a detailed account of how the Drug-gu 'A-no-mo-sōn (*sic*) and others had formerly ruined the coun-

ty, king Vijaya-Saṅgrāma ordered the councillors to assemble whatever army corps there were; and, having led his army into the countries of the kings who had previously done harm and ruined his country, ruined their country in return, slaughtering most of the people.

とあり、更に續して Vijaya-Saṅgrāma が Hsu-šan-ta の僧院を建てた物語がみえてゐる。

Drug-gu 吐谷渾説の根據となる所の世代數の數へ方は右の引用文の最初にみえてゐる Vijaya-Dharma としふ王を、その前の記事に出てゐる所の Dharmakīrti-sa の僧院を建てた Vijaya-Saṅgrāma の後に立つた王となし、それから十四代を経て又 Vijaya-Kīrti としふ王が出て、その時代に Drug-gu が于闐に侵入し、次にその子の Vijaya-Saṅgrāma が王位に即したものとみるのである。この見方に従ふと Vijaya-Kīrti と Vijaya-Saṅgrāma としふ王は右の個所に於て二人づゝゐた事となるのであつて、從來は印度に出兵したとすゝ最初の Vijaya-Kīrti を Vijaya-Kīrti (I), Drug-gu 侵入の當時の王を Vijaya-Kīrti (II) と爲し、Vijaya-Kīrti (I) の次の王を Vijaya-Saṅgrāma (I), Vijaya-Kīrti (II) の次の王を Vijaya-Saṅgrāma (II) と爲してゐる。前述の世代數の十四又は十五といふ數へ方は Vijaya-Kīrti (II) を數へるか數へないかによつて異なるのであらう。併し乍ら私は右の如き此の記事の解釋は誤つてゐる様に考へる。

右の解釋に於て第一に疑問になるのは Vijaya-Kīrti 及び Vijaya-Saṅgrāma と呼ぶ王が二人づゝあつたといふ點である。單に同名の王が二人あつたといふ丈ならばさして疑問とするには當らないかも知れないが、兩者共に Vijaya-Kīrti の次が Vijaya-Saṅgrāma であり、何れも

二人の關係は父子であつて、二つの場合は餘りによく一致してゐるのである。惟ふに是等は結局二組がそれ／＼同名の四人の人ではなくて、何れも同じ二人の事を述べたものではなからうか。從來の論者は右に引用した記事の全部を、その前の記載にみえる所の *Vijaya-Saṅgrāma* よりも後の時代に屬するものと解釋したのであるけれども、この記事は寧ろ *Vijaya-Saṅgrāma* よりも以前の事を述べてゐる様に思はれる。于闐國史には *Vijaya-Saṅgrāma* の父の印度に兵を出したといふ *Vijaya-Kīrti* に關する記事の前に *Vijaya-Siṃha* 王の記事が在し、更にその前をみると *Vijaya-Siṃha* の父の *Vijaya-Dharma* 王に關する甚だ長文の記載がみえてゐる。前掲引用文の最初にみえる *Vijaya-Dharma* といふのは、此の *Vijaya-Dharma* を指してをり、十四代とはそれから以後印度に出兵した *Vijaya-Kīrti* までを數へたものではあるまいか。

于闐國史の記事の大部分は僧院寺塔の建立を中心としてその由來を記し、國初の記事以外には總ての王に就いて僧院寺塔の建立の事が記されてゐるのであつて、一方からいへば僧院寺塔の建立者として重要でない王は省略されてゐる譯である。于闐國史の國初の記事には西曆十一世紀と考へられる *Bisan-bzān Bisan-la-brian* 王までを五十六代と數へてゐるが、實際に于闐國史に現れる王名はその半數よりも餘程少い。前掲の問題の于闐國史の記事は、先づ *Vijaya-Saṅgrāma* が *Dharmakīrti-sa* の僧院を建てたといふ物語を載せ、續いて更に彼が *Hga-zanta* の僧院を建てる様になつた由を述べたものであり、その由來を説明する爲に

筆を遡らせて彼より以前の時代に就いて記したものである。かく解すれば二組のそれ、同名の四人の王があつたと見做す必要はない。二組の王があつたとすれば、更に兩者に於ては何れもそれより前に屬する時代に同じく Vijaya-Dharma といふ王があつた事となる譯であつて、この點も亦餘りに似寄り過ぎてゐる。于闐國史の中には外敵の于闐侵入に關する記事は極めて少いが、前述した記載の外に Vijaya-Dharma の子の Vijaya-Simha 王の時 Ga-hjae が侵入し王が之を破つたといふ記載がある。前掲の記事には Vijaya-Dharma から後十四世の間に時々外敵の侵入と外國への出兵があつたことを傳へてゐるが、この Ga-hjae との戦は或はそれ等の事件の一つであつたかとも思はれる。問題の記事は Vijaya-Dharma 以後 Vijaya-Kirti の即位まで十四世を數へてゐるが、右の私の解釋によるとその中で Vijaya-Simha 一人丈の名前が知られてゐる事となる。Vijaya-Simha は Vijaya-Dharma の子であるといはれてゐるが、Vijaya-Simha とその次に表れて來る Vijaya-Kirti の間には兩者の關係を示す記事が全くみえてゐないのであり、恐らくこの間に於て多くの王名が省略されてゐるのであらうと思はれる。前述の如き于闐國史の記事の性質からみると、王名の省略は不思議とするには當らない。從來の解釋に従へば Vijaya-Dharma に續く十四代は一人もその名が知られてゐない事となる譯である。以上の私の説明は Thomas 氏の英譯を用ひたものであり、この問題の記事を寺本氏の和譯と比較するとその間に著しい差違があるが、是等を西藏語の原文に當つてみると、Thomas 氏の翻譯の方が正しいのであつて、私の解釋には別

に支障を来さなす。

Drug-en 吐谷渾説の根據となつた年代の定め方には、既述の如く十四代の數へ方の外に、Vijaya-Kirti の年代推定の問題があつた。私の十四代の數へ方によると、それは印度に兵を用ひた Vijaya-Kirti より以前を十四代數へたものであり、Drug-en の于闐侵入はこの Vijaya-Kirti の頃となる譯であつて、假に藤田博士大谷教授の Vijaya-Kirti の時代を西曆一二世紀とする説が正しいとするならば、Drug-en の侵入は一二世紀の事となり、それは吐谷渾の出現以前に屬するから Drug-en はこれを斷じて吐谷渾に比定する事が出來なくなるのである。併し乍ら私は又 Vijaya-Kirti の年代推定の方法も決して動かし難いものとは考へないのであつて、この年代推定の主要な基礎となる所の Gu-zan 王、Kanika 王の比定に就いてなほ疑問とするべき點があると思ふ。後述する如く西域發見の西藏語の年代記によると、Gu-zan は唐代に於て Drug-en の領域内に置かれてをり、恐らく Kuehen (或は Kucha) に比定される地名であつて、Drug-en が吐谷渾であるとしても突厥であるとしても、兎に角 Gu-zan が唐代にその領域内にあつたとすれば、從來の論者の如く之を貴霜とみる事は出來ない筈である。Kanika に就いては、于闐國史の原文に Ka-ni-kah-i-ryal-po とあるのを「Kanika の王」と讀んで之を地名とする者と、「Kanika 王」と讀んで人名と解する者があり、藤田博士は前者に屬してゐて之を康居とし、大谷教授は後者であつて之を迦膩色迦王とされるのであるが、兩者の比定は既に異つてをり、是等二つの中の何れか一つを絶對確實なものと見做すべきかどうか甚

だ疑問である。Drug-gu が唐蕃會盟碑其の他唐代の文獻に表れる事は明瞭な事實であるから、Vijaya-Kirti の時代を一二世紀とするならば Drug-gu は一二世紀から唐代までも西域に於て相當重要な意味を持つた事になる筈であるが、かゝる民族乃至國家の存在を考へる事は困難である。從來の Ka-ni-kah-rgyal-po の解釋は、決してかゝる困難を無視して Vijaya-Kirti の年代を一二世紀と爲し得る程に有力なものではないと思はれる。なほ大谷教授は Kanika を以て Gu-zan 王 Kanika とみてをられるが、この個所の西藏文はやはり Thomas 氏寺本氏の如く⁽¹⁹⁾ Gu-zan 王と Kanika 王を別であると見做すべきものであらう。

以上私は Drug-gu の于闐侵入を五世紀とみる説が決して確實な證據を持つものではない事を述べてきた。恐らく此の事件は一二世紀の頃ではなく、或は五世紀よりも更に後の時代に屬するものではないであらうか。私は從來の年代の推定を否定して、その推定に問題となつた記事から一應離れてみよう。于闐國史の完成された時期は十一世紀の中葉と考へられてをり、その中には吐蕃の于闐支配の記載もみえてゐて、唐の時代の記事が含まれてゐる事は疑を容れない。于闐に侵入した外敵としては五世紀中葉に吐谷渾と蠕蠕があり五世紀前半には又嚙噠が于闐を役屬せしめてゐるのであるけれども、舊唐書⁽²⁰⁾九卷一西戎傳の于闐の條に「先臣于西突厥」といひ新唐書⁽²¹⁾二西域傳の同國の條に「本臣突厥」とある如く、突厥も亦于闐をその支配下に服せしめてゐた。于闐國史の Take-tjo の尼院に關する記事の中には「Then king Vijaya-Saṅgrāma's younger brother, named Bre-sa-ya Stu-lag, whose consort Dru-gu-

mo……”といふ記載がみえてゐて、Dru-gu-mo とは Dru-gu lady の意味と見做されてゐるが、この Vijaya-Saigrama とは恐らく Dru-gu の于闐侵入に續く Vijaya-Saigrama であつて、その頃于闐と Dru-gu の間には可成り密接な關係が存した様である。于闐國史の中には Dru-gu 以外に嚙噓や吐谷渾や蠕蠕や突厥に比定出來さうな外敵の名前は見當らない。于闐に勢力を伸ばした Dru-gu を是等の何れかに比定するとしてみれば、莫然なる推測であるけれども、十一世紀に完成されて唐代の記事を含んでゐる于闐國史としては、隋代か唐初頃の突厥に就いて述べた事とする方が、五世紀の嚙噓や吐谷渾や蠕蠕に就いて物語り後代の突厥を省略したとみるよりも、或は自然なのではあるまいか。寺本氏は Dru-gu の侵入を以て「唐以前に於て西突厥に壓迫せられ、突厥に事臣したる史的内容の記述なるべし。」とされてをり、Sten Konow 氏も既にこの個所の Dru-gu を「Turks である」と爲してゐる。于闐に侵入した Dru-gu の人名として現れてゐる 'An-no-sos と 'A-no-mo-soin は同一人と見做されるが、之を吐谷渾の慕利延と解すればその名稱が全く一致しないこととなるのである。藤田博士は 'A-no-sos は多分實名でなく Sanskrit の Anasah (noseless) の訛であるといはれてゐるが、此の博士の説明には特に何か史料があるといふ譯ではなし。Dru-gu を突厥であつたとしてみれば、'A-no- は阿史那の音を不完全に寫したものととも考へられる。

Dru-gu に關する于闐國史の記事としては、于闐侵入の事件の外に、その後この事件直後の Vijaya-Saigrama とは別人と見做される所の Vijaya-Saigrama といふ同名の王が、その子 Vija-

ya-Vikrama (Vijaya-Saigrama?) と共に支那に赴き Drugu の軍隊が歸りの路を塞いだ爲に父は支那で死んだといふ記載がみえてゐた。⁽²³⁾ 唐の時代に來朝した于闐王には、貞觀の末年^{西曆六四九年}に來た伏闍信、上元元年^{西曆六四四年}に來た伏闍雄、天寶中に來た尉遲勝があり、藤田博士は Drugu を吐谷渾として、支那に來た Vijaya-Saigrama は吐谷渾滅亡^{西曆六三三年}の以前に屬する伏闍信の事であるとされてをり、一方 Thomas 氏は之を伏闍雄に比定してゐる。⁽²⁴⁾ この伏闍信伏闍雄はその死没の事實が知られてゐないけれども、いま舊唐書^{卷一〇四}新唐書^{卷一〇}の尉遲勝の傳をみてみると、彼は天寶中に來朝し貞元中に沒した事が記されてゐて、支那で沒した Vijaya-Saigrama は或は尉遲勝であつたのではないかも知へられる。伏闍雄或は尉遲勝に比定する説が成立つとすれば、年代的に Drugu 吐谷渾説は甚だ困難となるのであるが、私は現在藤田博士の伏闍信説が他の二説に比較して確かに勝れてゐるといふ確證を認める事が出來ず、⁽²⁵⁾ Vijaya-Saigrama の記事それ自身の中から Drugu 吐谷渾説の論據として特に注意するべきものを見出し得ないのである。假に博士の伏闍信説が確實なものとしても、それ丈ではこの場合の Drugu を吐谷渾に比定する十分な確證とはならないであらう。此の如く支那に赴いた Vijaya-Saigrama の記事の中から吐谷渾説の有力な證據は現在發見する事が出來ないが、然らばこの場合の Drugu は之を寺本氏のいはれる如く⁽²⁶⁾突厥と解すれば少しも不都合がないかといふと、之を突厥としてみても、廣く突厥の類族としてみても、——後述する如く私は廻廻を意味した場合があつたと考へるのであるが——そこになほ聊か疑

問とするべき點がある様である。即ちそれは于闐國史の Druseu の侵入の事件から支那に赴いた Vijaya-Saigrama までの期間を如何に見るかといふ問題であつて、于闐國史にはその期間の記事はさして多くないのであるが、この間には六人の王名がみえてをり、少くも十四代を経たといふ記事の内容になつてゐる。Druseu の侵入を西突厥の盛時とする、Vijaya-Saigrama を伏闐信伏闐雄に比定すれば勿論のこと、尉遲勝としてみてもその期間は十四代を経たとしては短きに過ぎはしまいかと思はれるのであり、尉遲勝の場合としてこの期間はせいゝ一世紀半位である。併し乍ら之は又一方からみると、于闐國史の十四代を數へる如き記事が或は正確なものでないかも知れず、又一世紀半位の間に十四人の王が立つといふのもあり得る事であつて、右の期間に關する疑問といふのは、Druseu を以て突厥乃至はその類族と爲す説を否定し去つて仕舞ふ程に有力なものとも思はれない。

以上于闐國史に就いて私が縷々論じて來た所は、要するにその記事に基く所の吐谷渾説の論據を否定したものであり、而して又同時に、現在に至るまでその記事の中から、Druseu を突厥乃至その類族とみる説を否定し去つて仕舞ふ様な確證が全く發見されないことを述べたのである。私は于闐國史の Druseu を突厥とする見界に就いて一言したし、又後述する如く實際に Druseu 突厥説を採るのであるけれども、併し乍ら決して于闐國史を史料としてこの説を主張するのではなく、その論據は別の史料に求めるのである。既に藤田博士が注意された所であるが、私も于闐國史の所傳には餘程混亂があるであらうと考へる。その

記事の解釋が困難である事は以上述べた所からみても明かであらう。于闐國史が十一世紀中葉に完成したとすれば、その時は既に吐谷渾や突厥の衰亡の後多くの年月を経過してゐる譯であり、于闐國史の Drug-gu といふ名稱が、その本來の意味とは異なる内容で用ひられたかも知れないといふ可能性も一應考へられない事はない。兎に角于闐國史の記事の年代が可成り全般的に考定されない中は、——而してその考定は甚だ困難な様であるが、——その記事を史料として Drug-gu を比定するのは餘程の危険性を含むものといはなければならぬ。當面の問題たる Drug-gu の比定には、一先づこの史料を除外して、他の史料に重要性を置く方が安全である。

C 吐谷渾の谷の音とその西藏名

さて次に問題となるのは、Drug-gu 吐谷渾説の第三の論據とされる所の吐谷渾の谷の音の解釋である。藤田博士及び大谷教授は共に谷の古音に鹿音のある所から吐谷渾の谷も鹿音であるとして、吐谷渾は Drug-gu (Drug-gu, Drug) と甚だ音が似寄つてゐるとされるのであるけれども、併し私は之に對しても亦俄に賛意を表し得ないと考へる。谷に鹿音のほか欲音のあつた事は、廣韻に「谷又欲鹿二音」といつてゐるのによつても明かである。谷に幾つか読み方があつたとしても、大谷教授も注意された史炤の通鑑釋文^{卷第十三}の記事に「吐谷渾、谷余蜀切渾戶昆切」とあるのからみると、恐らく吐谷渾の谷は欲と讀む方が適當であらう。

吐谷渾は又吐渾とか退渾とか書かれた場合があり、Pelliot 氏が敦煌で發見した文書の中には退渾とみえてゐるのであるが、この退渾といふ文字は吐谷渾の谷が欲音であつた事を示す様である。退は吐谷渾の吐のみに當る音でなく吐と次の谷の最初の部分までに相當するものであり、それは谷が欲と讀まれた證據とするべきではないであらうか。これに反し、吐谷渾の谷が鹿音であるといふ有力な證據は見當らない様に思はれる。Laufer氏によると西藏文の *Gyal-rabs* の中には吐谷渾を *Thu-lu-hun* と爲した所があるといふのであるが、*Gyal-rabs* は十四世紀のもので、*Thu-lu-hun* の記事は支那の文獻に基いて記した文字であり、既に Pelliot 氏は之に信を措き難い事を述べてゐる。通鑑釋文及び退渾の文字を論據とする場合と、支那の文獻に基いた十四世紀の西藏文を論據とする場合とを比較すれば、私は前者の方により以上の信頼を置かなければならないと考へる。Pelliot 氏は吐谷渾の原名を **Tu-ty-yun* (**Tuyuy-yun*) 或は **Tu-yun* (**Tuyuyun*) と爲してゐるが、恐らくその様な音であつたらう。谷を欲音とすれば吐谷渾を *Drug-u* とする事は困難である。

以上私は *Drug-u* 吐谷渾説の論據である所の三つの點を批判して、是等が何れも確實なものでない事を述べ、又その中には之を吐谷渾以外のものに比定する方がよいと思はれる幾つかの問題の存する事を述べて來たが、なほこゝには更に吐谷渾説を一層困難ならしめるものとして、西藏文の文書中に別に吐谷渾を指すと見做すべき *Ha-na* といふ名稱が存在する事を注意して置く必要がある。Ha-na に關する文獻は幾つもあるが、最も注意すべき

ものは Pelliot 氏が敦煌で發見した所の前述の退渾といふ文字のみえてゐる蕃漢對譯の數語を含む文書であつて、それにはこの退渾が Ha-za となつてゐる。Pelliot 氏はこの Ha-za を吐谷渾として、吐谷渾の別名とされてゐる所の阿柴虜、阿貴虜に當てゐるが、是は鐵案とみるべきものと思はれる。⁽³³⁾その後 Thomas 氏は種々西藏語の文書の Ha-za に關する史料を譯出し、Pelliot 氏の Ha-za 吐谷渾説を疑つてゐるが、⁽³⁴⁾その疑問はそれ程有力なものではない様である。即ち Thomas 氏の疑問とするのは、つまり Ha-za の名が吐谷渾の滅亡後八世紀の中葉までの年代の記事に表れてゐる點と、それが西方沙州の奥地 Miran, Charklik 方面にまで居つたといふ點との二つであつて、この二點が吐谷渾と一致しないと考へるのであるけれども、併し吐谷渾の國が吐蕃に併合されたとしても、それは決して吐谷渾の民族が消滅して仕舞つた事を意味するものでなく、現に舊唐書^{六卷下}一九吐蕃傳の大曆十一年^{西曆七}條や長慶二年^{西曆八}の會盟使劉元鼎の路程の記事に吐渾・吐谷渾國がみえてゐるのによつてもその事は明かであるし、又一方吐谷渾が以前から西方に發展して鄯善且末を支配下に置き、唐初に於ても之を領有してゐた事は既に松田學士の論ぜられた所によつて明瞭であるから、⁽³⁵⁾吐谷渾が此の方面にゐたといふ事は何も特に不思議とするには當らないと思はれる。なほ大谷教授は Thomas 氏の説に注意を拂はれて、Pelliot 氏發見の文書の記載を疑つてをられるが、⁽³⁶⁾私は現在知られてゐる Ha-za の諸史料の中には、Pelliot 氏の説とその發見した文書の記事を否定し去らなければならぬ様な確證は一つも見出されないと考へる。

Ha-na はやはり吐谷渾に相違なく、更にその上に Drug-gu を吐谷渾に當てるのは困難であると思はれる。

二 Drug-gu を突厥と見做すべき史料

然らば結局 Drug-gu は何に比定するべきであらうか。私は之を突厥に比定する明瞭な證據があると考へる。

その第一の史料は燉煌遺書第一輯に收められた釋迦牟尼如來像法滅盡之記にみえる記事である。釋迦牟尼如來像法滅盡之記は *Li-hi-yul-gyi-lun-bstan-pa* 即ち于闐國史の最初の部分を漢譯したものであり、その翻譯者の沙門法成は石濱純太郎氏・羽田博士の研究によつて九世紀の中葉乃至前半の人であつた事が知られてゐる。⁽⁸⁷⁾ 滅盡之記の西藏文は *Bstan bgyur* に載せられてゐる外 *Stein* 氏蒐集の敦煌文書の中にそれが存してをり、此の西藏文と漢文を對照すれば當時の譯語が明かになるのであつて、滅盡之記の中には西藏文の *So-byi, Drug-gu* (*Bstan-bgyur* には *Drug-gu*), *Hor* に對して、それ／＼順次に蘇毗突厥、廻鶻を當てゝゐる。既に羽田博士が滅盡之記の解説に於て述べられた所であるが、此の *Drug-gu* が突厥に當る事は疑問の餘地のない所であらう。⁽⁸⁸⁾

第二の史料は *Bstan-bgyur* に收められてゐる *Arhat-Saṅghavarḍhana-vyakaraṇa* 即ち *Dgra-boom-pa-Dge-bdun-lphel-gyi-lun-bstan-pa* の記事である。此の書は *Thomas* 氏が *The Prophecy of*

the Arhat Saṃghavarḍhana として寺本氏が「僧伽婆爾陀那の于闐懸記」として翻譯された所であるが、その最初に著作された時期は餘程古くまで遡るらしく、既に八世紀又はそれ以前に作られたと見做される所の *Dri-ma-med-pa-li-hod-kylis-zus-pa* の中に之が引かれてゐる⁽²⁾。Arhat-Saṃghavarḍhana-*vyākaraṇa* の問題の記事といふのは、Thomas 氏の譯を掲げると次の様になる。

After that, excepting in the Middle Country, there will be in this Jambū-dvīpa three unbelieveds. The kingdom of Srig-ni and so forth will be ruled by the Stag-gzig; the sovereignty of the various Drug-gu races will be held by the Drug-gus; over many others the sovereignty will be held by the king of Tibet.

此の記事は無信の三つの國が將來發展する事を豫言したものであるが、勿論豫言といつてもそれは實際の歴史事實を豫言の形で言ひ表したものである。Stag-gzig は明かに大食であり、Srig-ni は Shighuan を指したものの様である。Drug-gu, Drug-gus は大食吐蕃と並んで記されてゐる所をみると餘程有力なものであつたに相違なく、それはやはりトルコ族に比定すべきものと思はれる。Drug-gu 諸族を支配する様になる Drug-gus といふのは恐らく突騎施の事であつて、Drug-gu は Türk (突厥) に、Drug-gus は Türgs (突騎施) に當てるべきであらう。突騎施が西突厥に屬する十姓の一つから出て、大いに勢力を發展せしめた事實は右の記載と甚だよく一致してゐる。Drug-gu を突厥以外に求める事としては他の有力な國家

乃至民族の中に Drug-gu と Drug-gus という一組の似寄つた名稱を適當に比定出来る様な場合は到底發見する事が不可能である。右の記事には 'the various Drug-gu races' とあつて Drug-gu という名稱の中には幾つかの部族が含まれてゐると見做される。惟ふにそれは西突厥の十姓の如きものを指してゐるのではないであらうか。右の記載が元來の Arhat-Saṃghavaradhana-vyākaraṇa にあつたとするとそれは八世紀には遡る所の極めて重要な史料と見做される。

第三の史料となるのは敦煌發見の西藏文の年代記である。この年代記の初の部分は Pelliot 蒐集文書の中にあり、後の部分は Stein 蒐集文書の中に存するが、それは七世紀から八世紀にかけて七十六年間の毎年の記事を載せた所の西域史の研究上極めて重要な史料であり、その記事は年次をも正確に記してゐる。この年代記の全體の研究は未だ十分に行はれてゐなければ、その中に現れる所の Drug-gu に關する史料は Thomas 氏によつて既に翻譯されてゐるのであつて、こゝには同氏の英譯を掲げて置く。⁽⁴²⁾

1. (A. D. 675) Councillor Bisan-sña, having defeated the Zān-zuñ in Gu-ran of Zims, went to Ltañ-yor in the Dru-gu country.

2. (A. D. 676) Councillor Bisan-sña, having marched into the Dru-gu country, sent vegetables to Khri-bśos town.

3. (A. D. 686) Councillor Khri-ñbrin, lingering outside[on the way] from a [place] called Drain Drug-gu (Dru-gu, Drug) 耽耽ト。

in the Dru-gu country, held the summer assemblage in Šoñ-sna,

4. (A. D. 687) Councillor Khri-ñbrin marched into the Dru-gu Gu-zan country.
5. (A. D. 689) The great Councillor Khri-ñbrin returning from the Dru-gu country.
6. (A. D. 700) The Breañ-po... sent the Khagan Ton Yab-go into the Dru-gu country.
7. (A. D. 729) The Great Councillor Cui-bzañ, having held the winter muster in Šo-ma-ra of Skyi, made a counting of the reinforcements and losses of the Mui troops, and led his army into the Dru-gu country and returned.

8. (A. D. 736) The Great Chief Khri-chun of Cog-ro marched into the Dru-gu country.

是等の記事に關しては種々 Thomas 氏の説明があり、こゝに現れてゐる Dru-gu と關聯する地名に就いても既にその比定が行はれてゐる。^(註) 同氏は Gu-zan を以て Guchen と爲し Šoñ-sna を以て Hami 或は Pichan と Quruk-tagh の間の Shonā-nor の低地と爲し Drañ を以て Bogdo-Ula の南の Taranchi と爲し Khri-bśos は Bagrash 湖を指し Khri-bśos town は Karasnar か Korla か其の他の地か兎に角 Bagrash 湖の附近と爲してゐる。是等は何れも近接した地點に求められてをり、右の比定はまづ誤のない所と認めてよからうと思はれる。但しこの Gu-zan は前述した所の于闐國史の Vijaya-Kirti に關する記事に表れてをり、同書の中にはなほ 'Er-mo-no の尼院に關する記載の中に于闐の王女が會て Gu-zan (Gu-zin?) の王庭にあつたと思はれる記事が存するが、その名稱は Guchen の外になほ高昌や龜茲とも少し

く音が類似してゐる様である。龜茲がトルコ文書の中に *küšan*, *küšan* となつてゐる事は羽田博士 Pelliot 氏の指摘された所であり、龜茲は唐書^{卷二}西域傳にもいふ如く突厥に臣事してゐた事もあつて、*Gu-zan* とは年代記の作られた當時又はそれ以前に *küšan*, *küšan* の名があつてその音を有聲化して寫したものと認め得る様でもある。併し乍ら一方 *Gu-chen* も亦相當重要な地點であつて、Thomas 氏の説は一概に之を退け得ない所であるからこゝにはそれについて一つの問題を提出するに留める事としよう。前掲文中の *Liah-yor* に就いては未だその地點を明かにする事が出来ない。兎に角右の如き地名の比定によつて *Dru-gu country* の中に含まれてゐる幾つかの地點が決定された譯であり、前掲の記事の 3 4 にみえる *Drañ* 及び *Gu-zan* は *Dru-gu country* の中に含まれてゐたに相違ない。3 の記事によると *Soi-sua* は *Khri-hriñ* が *Dru-gu country* からの歸途通過した地點の如くにも思はれるのであつてそれは *Dru-gu country* の外であつたものかとも見得る様であり 2 の記事の *Khri-bso* も甚だ明瞭ではなけれども、*Blean-sha* が *Dru-gu country* に侵入した上でその地に野菜を送つたといふのからみると、それは或は *Dru-gu country* の外であつたとする方が寧ろ自然であるかも知れない。

右の年代記の記事は西暦六七五年から七三六年までに亘つて吐蕃が *Dru-gu country* に侵入したといふ事を述べてゐるのであるが、支那の所傳によればそれは丁度吐蕃が安西四鎮を陥れてタクラマカン沙漠の北側に於て活動し、又そこに突厥とも關係を有してゐた時

代であつて年代記の記載はかゝる吐蕃の活動に關聯して記述したものに相違ない。その地方に於て此の時代又はそれ以前餘り遡らない時代に勢力を有した民族を求めてみると我々は漢族以外には突厥を數へなければならぬのであり、この年代記の Dru-gu もやはり突厥と見做さなければならぬと思はれる。前掲 6 の記事にみえる Khagan Ton Yab-go といふのは年代記の他の記事によると西曆六九四年、六九九年に既に服屬してゐた人物であるが、その名前は有名な西突厥の統葉護可汗の名と甚だよく類似してをり、それがトルコ語を寫したものである事は疑のない所であつて、彼は元來 Dru-gu であり Dru-gu country に赴いたものではあるまいか。但し年代記の記事中の Dru-gu は決して單獨に表れてゐるのでなくて總て Dru-gu country (Dru-gu-yul) としてみえてゐる事を一應注意して置く必要がある。年代記に Dru-gu-yul とあるのは或はその記事の當時の Dru-gu の支配してゐた地域といふのとは完全な一致を示すものでなかつたのかとも思はれる。西突厥の盛時に於てその支配した地域は甚だ廣く、殊に天山附近一帶の地には強くその力が及んでゐたと見做されるのであり、突厥の勢力が衰へて來てからも突厥のこれまで支配を及ぼした或る地域に對して突厥の地といふ名前を用ひる事はあり得るであらう。Dru-gu-yul がどの範圍の地域を意味する言葉かわからないけれども、年代記が敦煌發見の文獻である所からみると、それは Dru-gu-yul の範圍の中で敦煌に近い方面の事件を書き記してゐるのではあるまいか。年代記の 7 の記事の Skyi no So-ma-ra は Dru-gu-yul に進撃するに先立つて軍兵

を整へた地であり、Thomas 氏は此の地を説明して “The district must have been in or near Mo-snad, and probably on the Turkestan side of it” とつてをられるか、^(註)此の軍隊は吐蕃の領土の東の部分から出て或は西北の方向に赴いたのではないであらうか。若しも Son-sna 乃至 Kuri-bšos を Dru-gu-yul の中になかつたと見る事が出来るとすれば、Dru-gu-yul の一方の邊界を大體推定し得るのであるが、或は Dru-gu-yul は西突厥が強力に支配した範圍外には出ないものであるかも知れない。併し此の解釋についてはなほ暫く疑問を留保して置く。

第四に問題となるのは西域發見の西藏文書にみえる東の Dru-gu と西の Dru-gu に関する記事であつて、Thomas 氏の英譯によつて之を掲げると次の様である。^(註)

Next the present period is the period of loans and taxes. When of this period three hundred and sixty years had passed, there came from a land on the far side of a great lake below (sc. west of) the country of China, a black-face king, riding in a black chariot, who flourished during sixty years. China did homage to that black-head and was subjugated by him. When of that king's time sixty years had passed, there arose from a small cave in the Chinese swamp country of the Bug *chor* a man called the Great Drug, who annihilated both the black-face king of China and the king of the Bug *chor*; the people of both China and the Bug *chor* were subjugated by that king and paid taxes. The Great Drug king flourished during seventy-two years. After he had

flourished seventy-two years the Dru-gu of the East and the Dru-gu of the West fought. At first the Dru-gu of the West....

右の文中の Bug chor に就きて Thomas 氏は之を甘肅となし、又沙州地方の土民が Hbrug と呼ばれた事を述べてをり、Bug と Hbrug とは或は同じものであるかと思はれる。右の記載は甚だ傳說的であつて、そのまゝ正確な史實であるとは爲し得ないけれども、Great Drug (Drug-chen-po) は支那をも服従せしめた大勢力であつたといふのからみると、それはトルコ族の活動を述べたものに相違なく、殊に東の Drugu と西の Dru-gu があつたといふのは、トルコ族の中でも大きく二つに分れた東突厥と西突厥を指したと見るのがよいだらう。西藏語では支那の事を Reya-nag (黒い國) と呼ぶが、右文中の black face とか black chariot とかふのは或は何か之と關係を有するものでもあらうか。

右に掲げた四つの史料は、Drug-gu を吐谷渾其他に比定しては到底解釋出來ない所である。そのみならず Drug-gu を突厥に比定するとすれば、Drug-gu, Dru-gu, Drug の音も Turk を寫したものととして極めて自然に解釋される⁽⁴⁹⁾。西藏文書の中には大谷教授も注意された如く Drug を Reya (China), Hjan (羌?) と並べて大國としてゐるが、この Drug も突厥乃至その類族と見て穩當に解釋する事が出来る。此の三國中に吐谷渾が含まれてゐたとすれば、寧ろそれは Drug よりも Hjan に求めるべきではあるまいか。

三 Drugu を廻鶻などと見做すべき史料

然らば Drugu の名の現れる場合には總て之を突厥と認めてよいかといふと、是はさうは考へられない。前述の Pelliot 氏發見の蕃漢對譯の語を含む文書には、Drugu を以て廻鶻に當てゐる⁽⁸⁾。恐らく Drugu は元來突厥を意味したものであつたけれども、突厥に代つて同じトルコ族の廻鶻が勢力を振ふに至つて、それが廻鶻をも意味する事となつたのであらう。

但し廻鶻に對しては此のほか西藏文書中に Hor という名稱がある。釋迦牟尼如來像法滅盡之記には Hor を廻鶻に當て、寺本氏の紹介された所の日本に傳へられた蕃漢對譯の地圖にも明かに Hor を廻鶻としてゐるのであり、⁽⁹⁾現在紹介されてゐる Hor に關する文獻には何等廻鶻と見做して不都合なものはない。Thomas 氏は “The Hor (Turks)” とされてゐるが、⁽¹⁰⁾Hor は廻鶻として支障がないと思はれるのであつて、Hor とは恐らく Uigur の Yur に當る音であらう。Thomas 氏は又起原の餘程古うと思はれる Bon の文獻の中に Drugu の大體の位置が述べられてゐて、南方に於ては Ba-dag-san (Badakshan) の山が Drugu と Tsha-geer 人との界を爲し、他方には San-la-nag-po の山がそれと Hor との境を爲すといつてゐるのを注意してゐられるが、この記事の起原が古いとすれば、それは Drugu と Hor を區別して同時に記してゐる史料として見逃し難いものであらう。⁽¹¹⁾Badakshan の方面に居つたとする Drugu は

やはり突厥の種類と見るべきであり、廻鶻がそれに隣してゐたといふのであらう。兎に角廻鶻には Hor という名前が存在するのであるが、それだからといつて私は廻鶻を Dru-gu と爲す所の Pelliot 氏發見の文書の内容を否定する必要はないと考へる。Drug-gu は突厥以外のトルコ族に對しても用ひられ、廻鶻を意味する場合があつたとみてよいだらう。Drug-gu 吐谷渾説を採るとすれば、當然大谷教授のいはれる如く右の Pelliot 文書の Dru-gu はその本來の意味を表したものでなく、混用乃至誤謬があつたとしなければならぬが、同じく Dru-gu の本來の意味が失はれてゐると考へるにしても、その名が吐谷渾から廻鶻に移つたとすふよりも、同じトルコ族であつて似寄つた方面に活動してゐた突厥から廻鶻に移つたとする方が寧ろ自然ではないであらうか。

なほ Thomas 氏の研究された西域發見の西藏文書の中には、Drug-gu の一種と思はれる Little Drug (Drug cun) の名が幾度かみえてをり、又 Great Drug (Drug che) Upper Dru-gu (stod-gyi-Dru-gu), Dru-gu-cor (or Dru-gu-hior) という文字もみえてゐる。Little Drug の名は文書の中に Ha-za, Sa-cu 州沙瓜・Kva-cu 州瓜・Ston-sar 附近沙州 などと共に現れてをり、Upper Dru-gu は Tshal-byi とする地名と共に現れてゐて、Thomas 氏は Tshal-byi を Cer-cen 方面の山地としてをられる。Upper Dru-gu とは或はその地方が高地であつた所から名づけたものであるかも知れない。Dru-gu-cor, Dru-gu-hior については、同氏は cor, hior をトルコ語の cur (count, county) であるとして、その位置を西藏支配下の Nob region 以前 ⁽⁴⁷⁾ に當てゝをられる。是等の地名が現れてゐる

る事によつて、我々は Little Drug, Upper Dru-gu などと交渉を持つた地名を知る事が出来るのであるが、惟ふに是等の Dru-gu は何れもトルコ族であつて、沙州瓜州鄯善且末などの附近の方面に移住して來たものを指すのであらう。是等をそのまゝ突厥となして了ふ事は出来ないが、兎に角それはトルコ族であり恐らく廻鶻などを含むのではあるまいか。吐蕃の勢力に服し、又南方に移住したトルコ族は相當の數に上るものと思はれるのであつて、前述した西藏文の年代記によつてみても七世紀には既に吐蕃に従つた可汗がゐた譯である。cor, hior がトルコ語であるとすれば、Dru-gu-cor の Dru-gu は勿論トルコ族であらう。この方面の Dru-gu 殊に Little Dru-gu が吐谷渾でなかつた事はそれが Ha'-za と並んで現はれてゐるのによつて明かである。Little Drug, Upper Dru-gu の名前に little, upper などの限定的な形容語が用ひられてゐるのは、それが本來の Dru-gu でない事を意味するのであらう。Great Dru-gu の位置は未だ明かでないが、それは Dru-gu の主要な部分を指してゐるのであるまいか。

結 語

以上此の論文に於て述べて來た所に據つて私は Drug-gu, Dru-gu, Drug が突厥を指したものであり、それが後に同じトルコ族、殊に廻鶻に對しても用ひられる様になつたといふ結論に到達したのであつて、而して一方 Dru-gu を吐谷渾に比定しなければならぬやうな

史料の存在しない事を論證した。從來の吐谷渾説を基礎付けてゐた所の三つの論據の中で、唐蕃會盟碑及び Drug-gu の名稱は寧ろ私の解釋を支持するものであらう。疑問の多い于闐國史の記事も現在知られてゐる所では、特に私の解釋よりも吐谷渾説に好都合であるとは思はれない。こゝには Drug-gu に關係のある文獻の全部を引用したのでないが、上述の解釋に支障を來す様な史料は見當らない。

此の論文は總て從來の學者の既に紹介した史料、殊に Thomas 氏のそれを利用して唯之に對する適當と思はれる解釋を述べたまでである。Thomas 氏の Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan は未だその第一卷が出版されたのみであるが、その第二卷には同氏が又 Drug-gu に關する史料を掲げて之に就いて論ぜられる事であらう。ここに擱筆するに當つて御教示を賜つた笠松學士に感謝の意を表し、御高説に妄評を加へた大谷教授に對して幾重にも御寛恕を乞ふ次第である。

註

- (1) 寺本婉雅氏「于闐國史」(大正十年)には、文中の Drug-gu が何れも突厥と譯されてゐる。燉煌遺書第一集、釋迦牟尼如來像法滅盡之記の羽田博士の解説。
- (2) P. Pelliot, Les Noms Tibétains de Tou-yu-houen et des Ouïgour J.A. 1912. pp. 520-523.
- (3) 羽溪了諦氏「西域の佛教」三九三頁。
- (4) Drug-gu, Drug-gu, Drug は同じものに相違ないから以下 Drug-gu と綴る。
- (5) L. A. Vaidelli, Ancient Historical Edicts at Lhasa. J.R.A.S. 1909, pp. 285-287. 藤田博士「西域研究」吐谷渾

「Drug (Drug-gu)」東西交渉史の研究(西域篇) 三二〇——三三五頁。

(6) F. W. Thomas; Tibetan Documents concerning Chinese Turkestan. (V) J.R.A.S. 1931. pp. 807-831.

(7) Waddell; op. cit. p. 330.

(8) 大谷教授「吐谷渾の名稱に就いて」一七——二一頁。

(9) 本文は大谷教授による。右側の文字は唐大詔令集、卷一二九、與吐蕃會清水盟文。

(10) 内藤虎次郎博士「拉薩の唐蕃會盟碑」研幾小錄、三二六——三二七頁。

(11) 寺本氏は碑文の Drug を Druñ と讀まれたといふ事であるが(大谷學報、昭和四年十月)こゝには諸學者の據り所とする Waddell 氏の解讀に従つて論じた。

(12) 藤田博士、三二三——三三二、大谷教授「一四——一七頁。

(13) W. W. Rockhill; Life of the Buddha. pp. 230-248. M. A. Stein; Ancient Khotan. I. Appendix E. pp. 561-563.

(14) 寺本氏「中國國史」一五〇頁 F. W. Thomas; Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan. Vol. I. pp. 77-135.

(15) Thomas; ibid. pp. 121-122.

(16) ibid. pp. 75, 108-104.

(17) Thomas 氏の英譯によると Vijaya-Sahgrāma が Dharmakīrti-Sa の僧院を建てたといふ物語があつて之に續いて前に引用した(一三・一四頁)問題の記事がみえてゐるが、寺本氏の譯(三三・三六頁)によると Vijaya-Sahgrāma の次に更に信訶王(Sen-Ge)といふ一人の王があつて Dharmakīrti-Sa に相當する僧院はこの信訶王が建立した事となつてをり、又問題の世代數の數々方は Vijaya-Dharma から Vijaya-Kīrti まづとちよひではなくて反對に Vijaya-Kīrti から Vijaya-Dharma の時まづとなつてゐるのである。若しも寺本氏のいはれる如くであるとするならば前述(一四——一六頁)の私の解釋は成立しない事となり、それのみならず吐谷渾説の論據となつた世代の數々方も亦變つて來る譯であるが、私はこの寺本氏の解釋には従ふ事が出来ないと考え

る。Thomas 氏の譯と寺本氏の譯はその基いた西藏文が全く異つてゐるのではなくて、唯その解釋が相違してゐると思はれる。こゝに一應信訶王の存在と、世代の數へ方に關する寺本氏の解釋を吟味してみよう。

Thomas 氏の譯によると Vijaya-Saṅgrāma に關する記事の初め部分は、

(A) Then subsequently came king Vijaya-Kṛti's son, named Vijaya-Saṅgrāma, a man of prowess and great heroism. In ventures against many enemies of li he slew a multitude of beings. (B) After that there came a man-slaying lion, and even an army sent (against it) recoiled; but the king encountered the lion single-handed and killed it, and thence obtained for himself the name "Lion"

とあり、之に相當する個所の寺本氏の譯文は、

(A) 次いで(第一世)伏閑耶稀帝王の子なる(第一世)伏閑耶散羅羅摩王(Vijayasāṅgrāma, 普勝戰王)出でたり。勇悍にして諸の外敵と戦ひ、多くの有情を殺戮せり。

(B) 次いで信訶王(Seh-Ge, Sihha, 獅子王)出づ、王は獅子の如く勇猛にして軍を送りて諸方を侵略せしが、遂に或る王のために捕へられて殺害せられたり。かの王を捕縛せしものはその王名を襲用して信訶王と稱せり。

となつてゐる。Vijaya-Saṅgrāma の次に信訶といふ王があつたといふ寺本氏の説は右の B の記事の解釋如何に懸つてゐる。東洋文庫所藏の Shar-tan 版 Bstan-ḥgyur の于闐國史によると、問題の B の記事は次の様になつてゐる。

de-lu-hog-tu-sen-ge-mi-la-r-god-pa-zig-byed-ste | dmag-gi-blab-na-yah-hkhums-te-rgyal-po-god-pus-set-ge-de-la-brgol-te-zh-nas-bkum | de-nas-rgyal-po-de-lu-mih-yah-sen-ger-bhags...

この文章をそのまゝに和譯すれば、「その後 seh-ge (獅子)が人〔々〕を弱ら^(つ)し軍隊が攻撃しても畏縮してしまつた。王は單身その seh-ge と戦ひ、捕へて殺した。それからその王の名も亦 seh-ge と名付けられた…」となり、Thomas 氏の譯の方が正しいものと見做される。——(東洋

文庫所藏の *Bstan-hgyur* には印刷不鮮明な解讀の困難な所があり、又私は西藏語に甚だ未熟である所から、右の引用及び次に引用する西藏文に就いては笠松單傳學士の御教示を受けた。——寺本氏は *Sgar-thar* 版に非ずして北京版にでもよられたかと思はれるが、右のテキストの内容には格別の差違はないだらう。寺本氏は B の記事の *seh-ge* (獅子) を以て *Vijaya-Sat-grama* に續くべき王の名前であると見做され、その他に別の王があつて彼を殺して *seh-ge* といふ名をとつたものと解された譯であるが、私は此の解釋には従ひ得ない。*seh-ge* とは決して王名ではなくて普通に獅子を意味したものであらう。*Vijaya-Sat-grama* は “a man of prowess and great heroism” であつて、前掲 A B の記事は、A に於て彼が外敵を征服した事をのべ、B には之に續いて更に勇敢な彼が獅子を殺して獅子王といはれる様になつた由を記したものに相違ない。于闐國史のこの記事の前後に現れる王名をみてみると、總てそれは梵語の形で現れてゐるから、*seh-ge* が若しも王の名前であつたとすれば、それは *Sinpha* とか *Vijaya-Sinpha* とかいふ形で記されてゐる筈であり、*seh-ge* といふ西藏語が用ひられてゐるのは、それが王名でなくて動物の獅子を意味するからである。于闐國史の終の方の部分にある *Dro-mo-bdra* の尼院に關する記事の初には Thomas 氏が “king *Vijaya-Sat-grama*, surnamed “Lion”” と爲し、寺本氏が “*Vijayasamgrām-Sinpha*” と爲した王名がみえてゐるが、是は A B の記事に表れる *Vijaya-Sat-grama* を指したに相違なく獅子を殺したのが彼であつた事を示してゐる。寺本氏の解釋によれば、*Sehge* 王を殺した他の王が *seh-ge* といふ名をとる様になつたといふのであるが、自分の殺した敵の王名を以て呼ばれる事となつたとみるよりも、獅子を殺した所から綽名がついたといふ方が自然である。

寺本氏の譯に關して第二の問題となる所の世代數の數へ方の記事は Thomas 氏の譯によると、私が本文に引用した長文の記事の最初の部分、即ち “Then from the time…” 云々に相當してゐる。寺本氏の譯にはその個所が、

Drug-gu (Drug-gu, Drug) になつて

次いで閼耶達摩王 (Jayadharma, 勝法王) は王國を支配せり。伏閼耶希帝王の即位より以來この王に至るまで十四代の間はあるときは外敵に侵入せられ……

となつてゐるが、東洋文庫の Snar-thab 版には是に相當する所に、

de-nas-rgyal-po-vi-ja-ya-dla-rnas-rgyal-srid-gzuth-ba-man-chad | vi-ja-ya-kri-tis-rgyal-po-beg-yis-pa-yun-chad-rgyal-po-rabs-bout-bzili-bar-du-res-ligali-ni-yul-du-phyi-dgra-gzan-gyis-dmag-draus-te …

とある。この文は「それから Vijaya-Dharma 王が王國を支持してより、Vijaya-Kirti が王になるに至るまで十四(王)位の間は屢々外敵が國內に軍を派して……」とすべきであり、Thomas 氏の譯が正しいといつてもいい。Vijaya-Kirti から Jayadharma まづと讀むべきではないと思はれる。

右の文の最初にみえる所の「Thomas 氏が Then と譯した de nas」といふ文字は丁度日本語の「それから」(de それ nas から)の意義であり、afterwards の意味にも用ひられるけれども又 also, from, at that time, then などの意味にも使はれる。この場合の de nas は「この文字より後の總ての記事が、それより前の總ての記事と比較して、時間的に後の時代に屬するといふ正確な意味で用ひられたものでなく、前段と異なる話を始めるに當つて序語の形で使用されたものである。于闐國史のその前後の記事をみると次々に後代の事を書き記してゐる節の初には、Thomas 氏が after that, afterwards, then subsequently と譯した delji-log-tu, de-nas-debji-log-tu などの文字が用ひられてゐるのであつて、それと異なるこの個所の de nas は、それ程時代的に嚴密な意味ではなかつたに相違ない。

(18)

藤田博士に於ては Vijaya-Kirti の年代決定の議論は「なほそれより前の Vijaya-Simha の時代に於ける于闐と Ga-hing の戦に關する解釋が關聯を持つてゐる。博士は「西域研究」の「莎車と Ga-hing」の條に此の戦を後漢書西域傳にみえる于闐と莎車との關係を述べたものとみられるのであるが、私は此の解釋も絶対に確實なものとは思はない。Khotan と Kashgar 方面の争は後漢書に記された以外にも何度かあつたであらう。問題の十四代の數へ方に對する私の

館蔵を正しいとすれば、この Vijaya-Sinpha は Vijaya-Krui よりも十三代も前となる譯である。藤田博士は車の古音は *ku, gu* で、遊車は *Ga-ljag* の *ljag* に當るとされてゐる。魏書卷一〇二の西域傳には「渠莎國居故莎車城」といふ記事がみえてゐるが、*Ga-ljag* は寧ろ渠莎に當てるべきものではなからうか。藤田博士、三〇七—三一六頁。

(19) Thomas; p. 119. 寺本氏、三四頁。

(20) Thomas; op. cit. p. 75. 寺本氏もこの年代について考へて居られるが、(六七—六九頁)こゝには暫く Thomas 氏による。

(21) 魏書西域傳。

(22) Thomas; op. cit. p. 131.

(23) 寺本氏、一四五頁。Sten Konow; *Khotan Studies*, J.R.A.S. 1914 pp. 346-347.

(24) 名前だけからみて突厥の中に *A-no-mo-foh* (*A-no-foes*) と類似したものを求めると新舊唐書の西突厥の傳に阿史那彌射がある。

(25) Thomas; p. 126.

(26) 藤田博士、三二九—三三二頁。Thomas; p. 126, n. 2.

(27) 王名の比定に關聯する問題として、なほ別々 *Drima-med-pah-ljod-kys-zus pa* (*The Inquiry of Vinala-prabha*) にみえる諸王の年代や、又于闐國史の支那に赴いた *Vijaya-Saṅgrāma* の記事の前後にみえる人名 *Bisan-ḡin Gun-ṣton*, *A-ra-cha Khe-meg* などについても論じなければならず、それは更に于闐國史の他の諸王の年次の問題と關係する譯であるが、それは餘りに多端に亙るものであるし、私には之を今全般的に論じる事が出来なから、總て省略する事とした。Thomas; op. cit. pp. 125-126, 159-164. Sten Konow; *Khotan Studies*, pp. 347-350. 參照。

(28) 寺本氏、四〇頁。寺本氏によると *Dru-gu* が再び于闐を攻撃した様であるが、Thomas 氏の譯には攻撃した事は記されてゐない。Thomas, p. 126.

Dru-gu (*Dru-gu, Drug*) と就ふ

- (39) 藤田博士『三三三——三三三頁。大谷教授二七——二九頁。
- (40) Pelliot; *Les Noms Tibétains des T'ou-yu-houen et des Ouigours*. J.A. 1912. p. 522.
- (41) Lanfer; *Die Sage von den goldgrabenden Ameisen*. T.P. 1903 p. 450. Lanfer; *Loan Words in Tibetan*. T.P. 1916 pp. 414-415. Pelliot; *Note sur les T'ou-yu-houen et les Sou-p'i*. T. P. XX. 1921. p. 323-324.
- (42) Pelliot; *Note*. p. 323.
- (43) *ibid.* pp. 324-325.
- (44) Thomas; *Tibetan Documents concerning Chinese Turkestan* (I) J.R.A.S. 1927. p. 85.
- (45) 松田壽男氏『吐谷渾遣使考下』史學雜誌第四十八編第十二號一四八七——一四九四頁。
- (46) 大谷教授『二四——二七頁。大谷教授は西藏文書中の Dru-gu が大國とされてゐるのに對して Ha-za は之と頗る趣を異にしてゐる點を注意してをられる。Drug-gu を私の見る如くに解釋し、又 Ha-za が吐谷渾を意味し、その國の瓦解の後にその民族を指したとすれば、兩者の間にいくる相違が現れるのは寧ろ自然であらう。餘りに多端に互るので私はこゝに Ha-za の諸史料を掲げて詳論する事は省略する。
- (47) *Lji-yul-egy-i-nih-bstan-pa* の最初の部分は大體次に述べる *Dgra-boon-pa-Dge-dun-hphel-egy-i-nih-bstan-pa* を採つたものである。*Lji-yul-egy-i-nih-bstan-pa* といふ名稱は元來此の部分の指し、それに續く年代紀の部分には *Li-yul-egy-i-o-ryus* の名があるが、後者は前者の續きと見做されて前者の名前は後者を含む意味で用ひられる。
- (48) 石濱純太郎氏『法成について』羽田亨博士同書後支那學第三卷第五號三七九——三八六頁。諏訪義謙氏『子闕國懸記』漢譯攷支那佛教史學第一卷第四號七九——八〇頁註2。
- (49) 燉煌遺書『釋迦牟尼如來像法滅盡之記解説』Thomas; *Tibetan Literary Texts and Documents*. p. 78. 諏訪氏、八五頁。
- (40) Thomas; *Tibetan Literary Texts and Documents*. pp. 41-60. 寺本氏五一——六五頁。

- (41) Thomas; *ibid.* p. 43. 諏訪義藏氏はこの *Dgra-boon-pa-Dge-hdun-bphei-gyi-lun-bstan-pa* の作られた時期を「西暦第七世紀の後半、それも終りに近う頃」とされてゐる。『子関國懸記』漢譯攷、八一—八二頁註 6。

- (42) Thomas; Tibetan Documents concerning Chinese Turkestan. (V) J.R.A.S. 1931. pp. 808-811.

- (43) Thomas; *ibid.* pp. 822-826.

- (44) 羽田博士「大月氏及び貴霜に就いて」史學雜誌、第四十一編第九號、一〇四二—一〇五一頁。

- Pelliot; *Tokharien et Koutchéan*. J.A. 1934. pp. 58-62.

- (45) 新舊唐書吐蕃傳其他西域諸國の條。

- (46) Thomas; *ibid.* pp. 809-810.

- (47) *ibid.*; p. 810.

- (48) *ibid.* pp. 819-820.

- (49) Pelliot 氏は突厥といふ文字が *Türküt* といふ複數形を表したものとされるのであるが、この複數形に就いては異論があつて、白鳥博士は之を否定されてをり、私は之には白鳥博士のうはれる如く *Türk* であると考えゝる。縱くそれが何れであつたとしても *Dru-gu, Dru-gu, Drug* はその音を寫したとして自然である。Pelliot; *Origine des Touk-tue, nom chinois des Turcs*. T.P. 1915. pp. 687-689.

- (50) Pelliot; *Les Noms Tibétains*. p. 522.

- (51) 寺本氏「我が國史と吐蕃との關係」大谷學報、十二卷第四號、六八四—六九六頁、卷頭寫眞。この地圖の突厥に當る文字は *Tala Thor-kus* と讀まれてゐる。

- (52) Thomas; Tibetan Documents; J.R.A.S. 1931. pp. 832-833.

- (53) *ibid.* p. 821. *Lhā-yul-gyi-lun-bstan-pa* と *Dru-gu* と *Hor* を並記する。

- (54) *ibid.* pp. 814-818.

- (55) *ibid.* pp. 827-830. *Dru-gu* と關つては之と並んで現れる *Gesar* の問題もあり、*Dru-gu* は又 *Gru-gu* と *da-gu* といふ。